

十六夜（梅柳中宵月）

へおぼろ夜に へ星の影さえ二つ三つ 四つか五つか鐘の音も もしや
我が身の追手かと 胸に時打つ思いにて 廓を抜けし十六夜が へ
落ちて行方も白魚の 舟のかがりに網よりも 人目いとうて後先に
心おく霜川端を 風に追われて来たりける

へ嬉しや今の人声は 追手ではなかったそうな 廓を抜けてよ
う／＼と ここまでは来たれども 行く先知れぬ夜の道 ど
こを あてどに行こうぞいの

へしばし佇む上手より へ梅見帰りの船の唄 へ忍ぶなら 闇の夜
はおかしやんせ 月に雲の障りなく しんき待宵十六夜の うちの首
尾はエよいとの へ聞く辻占にいそと 雲脚早き雨空も 思いがけ
なく吹き晴れて 見交わす月の顔と顔

へや 十六夜じゃないか
へ清心様か 逢いたかつたわいなア

へすがる袂もほころびて 色香こぼるる梅の花 さすがごなたも憎か
らで

へ見ればそなたはただ一人 廓を抜けてどこへ行くのじゃ
へどこへ行くとは胸欲な 今日ご追放と聞いた故 ひよつとこれ
ぎり逢われまいかと 思えば人のいうことも 心にかかる辻占
に 人目を忍んで来た私 いずれへなりと共々に 連れて退
いて下さんせ

へその心ざしは忝ないが ふとした心の迷いより ご恩ナ受けし
師の坊の お名を汚せしもつたいなさ

へただ何事もこれまでは 夢と思うて清心は 今本心に立ち返り
へ京へ上つて修行なし 出家得脱する心 そなたは廓へ立ち帰
り よい客あらば身を任せ 親へ孝行尽くしゃいのう

へそりや情けない清心さま

へ今更言うも愚痴ながら 悟る御身に迷いしは 蓮の浮気やちよう
と惚れ 浮いた心じゃござんせぬ へ弥陀を誓いに冥府まで かけて
嬉しき袈裟衣 結びし縁の数珠の緒を へたま逢うに切れよとは
仏姿にありながら へお前は鬼か清心さま へ聞こえぬわいのと取り
すがり 恨み嘆くぞ誠なる

へそくいやるは嬉しいが 見るかげもない所化あがり わしに心
中立てずとも 思い切るのがそなたのため

へそんならどうでも私をば 連れて退いては下さんせぬか

へさあ 悪いことは言わぬ程に 早う廓へ帰りゃいの

へそのお言葉が 冥途のみやげ

へ岸よりのぞく青柳の 枝もしだれて川の面 水に入りなん風情なり

へ南無阿弥陀仏

へすでにこうよと見えければ 清心あわて抱きとめ

へアアこれ待つた 早まるな

へいえ／＼ はなして殺して下さんせ しょせんながらえ居られぬわけ故

へなに ながらえて居られぬとは

へ勤めする身に恥ずかしい 私やお前の

へオ そんならもしや

へアイなあ

へこのまま別れて行くときは 腹の子までも闇から闇 とあつて 一緒にともなわば

へ廓を抜けしそなた故 捕えられなばかどわかし

へ再びなわめにあわんより いつその場で共々に

へそんなら死んで下さんすか

へほかに思案はないわいのう

へほんに思えば十六夜は 名よりも年は三つまし ちようど十九の

厄年に へ我が身も同じ二十五の この暁が別れとは 花を見捨て

て帰る雁 へそれは常闇の北の国 これは浄土の西の国 頼むは弥陀

の御誓い へなまいだ／＼／＼ へこれがこの世の別れかと 互いに抱

き月影も またもや曇る雨もよい

へこの世で添われぬ二人が悪縁

へ死のうと覚悟きわめし上は

へ少しも早う

へ南無阿弥陀仏

へ西へ向かいて合わす手も 凍る夜寒の川淀へ ざんぶと入るや水鳥の 浮き名をあとに残しける。